

絶対的な単独性を救うこと

ロドルフ・ガシェ『読むことのワイルド・カード——ポール・ド・マンについて』¹を読む

宮崎裕助

ポール・ド・マンという人物はいかなる存在として知られているだろうか。通例、文芸批評家ないし文学理論家であり、1970年代から80年代にかけてイェール大学の比較文学科を拠点としたイェール学派の領袖として、合衆国に「脱構築批評」を広めた人物であると説明されている。

言うまでもなく、脱構築は、ジャック・デリダの思想の鍵語として認知されている。他方、ド・マンの著書に『読むことのアレゴリー』という書物があり、たしかに脱構築という言葉をくり返し用いている箇所がある。ド・マンが、デリダに由来する脱構築という言葉が自著に援用していたことは事実である。70年代以降のデリダのアメリカでの活躍、そしてド・マンによる脱構築の援用、彼らの影響のもと、脱構築が合衆国の人文学界を中心に広まる過程で、それは文学テクストを読む方法論へと歪曲されていった。結果、脱構築はひとつの知的流行として消費され形骸化していく、といったところまでが一連のストーリーをなしている。

反面、次のような見方も出てくる。要するに、アメリカで流行った脱構築は偽物であり、デリダの脱構築こそ、本家本元である。脱構築はデリダという天才的個人だけに帰されるべきであり、英語圏で流行ったディコンストラクションはその貧しいミメシスにすぎず、エピゴーネン、亜流にすぎない、云々。

そうした認識が支配的であったためか、実際、日本語圏では1980年代、90年代までポール・ド・マンの著作はデリダに比べて積極的に読まれてこなかったし、ド・マンの著書たる『盲目と洞察』や『読むことのアレゴリー』の日本語訳が出たのもようやく2012年になってのことにすぎない。

1980年代の日本ではすでにフランス現代思想の受容が盛んであり、ポール・ド・マンの名も、デリダとの関連、柄谷行人や水村美苗と交流のあった書き手として知られていないわけではなかった。しかしデリダ研究者を含め、日本の現代思想の研究者は、ド・マンをほとんど読んでこなかったし、他方、しばしば理論的なド・マンの著作は、日本語圏の文学研究者にも十分に受容されることはなかった。つまり、ド・マンは実際には読まれることなく、曖昧な偏見や誤解に基づいてやり過ごされていたのである。

1987年の事件はその傾向を決定づけるものであったと言えるだろう。青年ド・マンが戦時中に対独協力下にあったベルギーの有力新聞『ル・ソワール』に寄稿し続けていた記事のなかに反ユダヤ主義的な文章が含まれていることが発見され、大きなスキャンダルとなった。この事件は、

¹ ロドルフ・ガシェ『読むことのアレゴリー——ポール・ド・マンについて』吉国浩哉・清水一浩・落合一樹訳、月曜社、2021年（原著は、Rodolphe Gasché, *The Wild Card of Reading: On Paul de Man*, Harvard University Press, 1998）。本文中の丸括弧内の頁数は、この訳書の参照ページを表す。

脱構築の敵対者にとって、もともと曖昧な理解に包まれていたド・マンの著作を性急に葬り去るのに好都合であった。すでにド・マンは死去しており、本人の反論の機会にはもはやなかった。これを機に、ド・マンの存在はますますきな臭いものとみなされるようになり、日本語圏ではド・マンの仕事を紹介し十分に検討する機会はいっそう少なくなっていくように思われる。²

最初に述べたように、ポール・ド・マンの理解にとって「脱構築」の語は切り離すことができない。しかしその受容とは別に、まず、デリダとド・マンについて事実関係を明確にしておく必要がある。ド・マンは、1919年にベルギーに生まれ、1983年に亡くなっている。デリダよりも11歳年上であり、ド・マンは、デリダが60年代末に哲学者として有名になる以前から、フランスの著名な批評誌『クリティック』等でブランショ論やヘルダーリン論を寄稿するなど、すでに自律した書き手であった。ド・マンは戦後間もない1948年に渡米し、フランス語教師をしながら糊口をしのいでいたが、他方で、アメリカで比較文学の研究者としてハーヴァード大学で1960年に博士号をようやく取得したという背景がある。

そもそもデリダを70年代半ばイェール大学の比較文学科に客員教授として招聘したのはド・マンであり、デリダがアメリカで脱構築の哲学者としてデビューできた、あるいは少なくともその後アメリカで持続的に活動し続けるモチベーションを得たのは、ド・マンという導きがあつてのことだといっても過言ではない。ド・マンがヨーロッパと合衆国のあいだにすでに切り開いていた道のうえでデリダは活躍できたのである（デリダの思想が当初米国で哲学というより文学読解のひとつの手法として受容されたのはそのためである）。

ド・マンのほうはといえば、デリダの脱構築に寄生しこの言葉を流用していたかのようにみなされることも少なくなかったが、実際は逆のことも多く生じていた。つまり、ド・マンが先駆けてデリダを受け容れる土壌や文脈をつくっていなければ、脱構築というものがそもそも生じなかったとさえ言えるのである。事実デリダははじめから脱構築を提唱していたわけではなく、アメリカで自分の思想を英語で分かりやすく説明するなかで、くり返し脱構築という言葉を使うようになっていったという経緯がある³。

² 日本語での受容については、1996年ド・マンの遺稿集『美学イデオロギー』の刊行に伴い、翌年雑誌『批評空間』で本書の翻訳の連載が始まったことが、現在から振り替えれば、最初の転換点であったかもしれない。2000年代に入ると、マーティン・マックイランの良質な入門書（『ポール・ド・マンの思想』土田知則訳、新曜社、2002年）や、クリストファー・ノリスの研究書（『ポール・ド・マン——脱構築と美学イデオロギー批判』時実早苗訳、法政大学出版局、2004年）が翻訳され、『批評空間』に連載されていた『美学イデオロギー』（上野成利訳、平凡社）も2005年に単行本で刊行された。その後、先ほど述べたように2012年の『盲目と洞察』（宮崎裕助・木内久美子訳、月曜社）と『読むことのアレゴリー』（土田知則訳、岩波書店）の翻訳の刊行、訳者土田氏による研究書『ポール・ド・マン——言語の不可能性、倫理の可能性』（岩波書店）、翌年の雑誌『思想』のポール・ド・マン特集号（2013年7月号）が出たことによって日本語圏においてポール・ド・マンを取り巻く状況は大きく変わったと言えるだろう。

³ たとえば、1979年『他者の耳』の討議での発言を参照。「私が「脱構築」という語を使ったとき、それも稀に、はじめはごく稀に一度か二度使っただけなのですが […] その当時の私の印象としては、それは他の多くの語のうちのひとつであり、テキストに属する二次的な語であって、いずれ消え去る

だからといってしかし、脱構築の真の起源はド・マンにあるということにはならない。ここで強調したいのは、脱構築は、デリダにもド・マンにも還元できるわけではなく、少なくともその狭間、デリダとド・マンのあいだに生じたのだということである。そして、ド・マンもデリダも亡くなっただけでもなお、脱構築とその展開にかんしては、この「あいだ」で考察しなければならないという点に変わりはない。デリダはその「あいだ」に「アメリカ」という名を見いだしている（「アメリカ、それは脱構築なるものだ」）⁴。そしてこの「あいだ」を切り拓いたのがド・マンなのであり、この点でド・マンの著作は、依然として検討されるべき余白を残したままにとどまっている。

この「あいだ」を思考するためには「デリダなき脱構築」をひとつの仮説として立ててみなければならない。そのもっとも不可欠にして顕著な極にド・マンが存在している。「ド・マン的脱構築」という言い方ができるとすれば、これを問うためには、ド・マンの思考の特異性を徹底的に追究しなければならない。ロドルフ・ガシェの大著『読むことのワイルド・カード』（1998年）がねらいとしているのはまさにこの点である。あらゆる影響関係から隔絶したド・マンの絶対的な単独性（シンギュラリティ）——あるいは本書の言葉を借りていえば「イディオシンクラティック（特異体質的）」なもの——を解明すべく、ド・マンの著作を、彼が活躍した北米を中心とするさまざまな理論的・批評的・哲学的な文脈へとあらためて置き直して検討してみることで、それが本書の企てをなしている。

1 ド・マン的脱構築の三つの段階

本書の主題は、タイトルに含まれているように「読むこと」についてである。これは、前言を撤回するようだが、たんに脱構築やデリダとの関係で問題になることではない。ド・マンの思考のラディカルさが端的に現れている主題であり、文学・哲学・思想等々の人文学、ひいてはあらゆる学問にかかわる者が一度は立ち止まって考えなければならない根本的な問いである。つまりテキスト——教科書であれ文学作品であれなんであれ——を「読むこと」なくしては、いかなる

だろうし、とにかくある一定の体制のうちに位置を占めるにしても、そこで支配的なものになることはまずないだろう、そういった語だったのです。私にとっては、それは痕跡、差延といった他の多くの語とともに形成されるひとつの連鎖の内部に、さらにはまた、たんにひとつの——こう言ってよければ——語彙集に限定されることのないある仕事全体の内部に含まれる、そういった語にほかならなかったのです。そこで次のような事態に立ちいたったのです […] つまり、私が一度か二度しか書いたことのないこの語、正確にはもうどこでだったかもはっきり思い出せませんが、その語が突然テキストの外へ飛び出し、他の人々がそれを横取りして、ご存じのような境遇にその語を置いたわけですが、こういう事態に直面して、私としてはそれ以後、自己正当化や説明を余儀なくされ、また戯れを試みざるをえなくなったのです。」C1・レヴェック、C・V・マクドナルド編『他者の耳——デリダ「ニーチェの耳伝」・自伝・翻訳』浜名優美・庄田常勝訳、産業図書、1988年、150頁。

⁴ 1984年のポール・ド・マンをめぐる連続講演での発言。ジャック・デリダ『メモワール——ポール・ド・マンのために』宮崎裕助・小原拓磨・吉松覚訳、水声社、2022年、46頁。

学問も始まらない以上、ここで問われているのは、あらゆる人間的活動にとって不可欠な条件なのである。

ごく概略的になるが、ド・マンの「読むこと」の理論——とすら本来は簡単には言えないものだが——から、ガシェが明確に抽出しているド・マン的脱構築の三つの段階を、主に本書第I章にそくして要約してみよう。

[1] ド・マンの「読むこと」の理論は「修辞学的読解」（あるいは端的に「たんなる読解」）と呼ばれており、まず、テキストの修辞的なレベルに着目する。そもそもどんなメッセージにも、文字通りの意味と、修辞的な意味とを想定することができる。たとえば、相手を尊重する敬語や褒め言葉も、度が過ぎるとよそよそしくなったり慇懃無礼になったりすることがあるし、「ほめ殺し」のような皮肉になることもある。反対に「バカ！」というような単純な罵倒語も、友人や恋人同士であればむしろ親しみや愛情を示すための唯一無二の言葉にさえなるだろう。

テキスト＝作品はつねに複数の水準で読みうるのであり、言葉の文字通りの文法・指示的レベルではしばしば理解・解釈を完結することができない。それは別のレベル、たとえば、作者の意図、作者の生涯（リアリズム）、主題やモチーフ群の関連性や集合（テマティズム）、作品そのものの構造や形式（形式主義や記号論）、同作者の他の作品や同ジャンルの諸作品との関係（関係主義）、それが置かれている社会や時代状況（社会反映論）、あるいは読者独自の思い入れ（読書感想文から大作家の直感的な批評まで）等々、さまざまな上位レベルによって補完されることを要求している。かくしてこれらの諸レベルに応じて各々の読解の方法論が形成されることになる。

これらは当然のことながら、各々の基準の優位をみずから主張するが、その一貫性を主張するさいには必ず当のレベルで対象となる作品の総体を説明できるとする全体化の幻想を引き起こす。ド・マンによれば、そこには必ず全体化を正当化するメタファー（隠喩）的な作用が見いだされるのであり、ド・マンのいう修辞的読解が目指す脱構築の第一段階は、テキストの文字通りの意味を括弧にくくったうえで、そうした全体化を引き起こす修辞的作用に焦点を合わせることにより、その全体化作用の幻想を暴露することである（たとえば、ルソーにおける「自然」の修辞）。

「修辞」と言われるのは、もちろんさまざまなレトリックやトロープ（文彩）を分類・定義してきた修辞学の伝統を背景にしてのことである。しかしド・マンが企てているのは伝統的な修辞学が行なうようなさまざまなレトリックやトロープの分類ではない。ド・マンが問題視しているのは、当の言葉が何を意味するのか（文字通りの意味）ではなく、どのように意味するのかにかんして、そうした意味に価値を付与する諸審級やレベル（作品解釈の諸方法論）が一定の修辞に依存しているということであり、そのような隠れた契機を明るみに出すという意味で「修辞的読解」が主張されているのである。

[2] では、全体化を批判するそのような「修辞的読解」そのものは自身の洞察と立場を再全体化する危険はないのだろうか。ド・マン的脱構築の第二段階はこの水準に向けられる。修辞的読解による第一の脱構築は、文字通りの意味が、それらを取り囲む文脈や諸関係といったメタレベルの諸水準には還元しえないことを暴くべく、テキストの修辞的な水準に積極的に着目し、その

全体化作用の幻想を解明するものであった。しかしその種の批判を打ち出す修辭的読解は、みずからがそう主張するほど積極的に主張しうるものなのだろうか。

否である。一方で、全体化の批判を通じていったん括弧にくくったはずの文字通りの意味があらためて回帰してくることになる。他方では、メタレベルにある修辭的な意味が完結しえないことが明らかになる以上、修辭的読解は、文字通りの意味と修辭的な意味のあいだで、さらには言語の諸水準をなすもろもろの意味の諸層あいだで決定不可能性のうちに置かれてしまい、その身分の一貫性が引き裂かれることになるのである（『読むことのアレゴリー』の有名な例として、アーチ・バンカーが発した「What's the difference?」の修辭疑問が、文字通りの疑問文とのあいだで機能不全に陥る一幕を想起することができるだろう）。

一見して修辭的読解は、こうした決定不可能性そのものを主張する否定的洞察のようにもみえる。しかしこれはそのものとしては一貫しえず、ひとつの包括的な主張たりえないというのがド・マン的脱構築の第二の段階の帰結である。というのもこれは、論理的に言って、字義の意味／修辭的意味の決定不可能性の主張がみずからの修辭的意味にも言及せざるをえないかぎり、当の否定的洞察はそうした主張そのものにも及ぶからである。ガシェがド・マンのいささか舌足らずな議論を展開して明確にしているように「脱構築は、あらゆる統一審級についての否定的洞察を言い表す」（44頁）。この洞察は、脱構築自身のプロセスを含めていかなる全体化の原理も許容しないのである。

[3] ド・マン的脱構築の第三段階というものがあるとしたら、それは自身の否定的な形式化すら破壊する以上、脱構築のプロセスがけっして終らないという点にある。ド・マンは、こうした無限のプロセスを、メタファーの全体化作用に抗する修辭的形象たる「アレゴリー」によって特徴づけた。しかしまさにここでの議論は、そうした形象へと要約することすら許さない自己破壊的な働きにある。このような（脱形象的な）形象をド・マンは「アイロニー的アレゴリー」と呼んだのであった。

かくしてド・マンが読むことの理論を探究するなかで打ち立てた修辭的読解は、読解理論の行なう一貫した主張のいかなる全体化も斥けつつ、そうと主張するみずからの否定的な主張すらも斥けるという「永遠の破綻」としか言いようがない読解の（理論ならぬ）理論へと逢着する。このような事態が、ド・マンのいう「読むことのアレゴリー」であり、正確にいうなら、読むことの根底的な不可能性のアレゴリー（49頁）である。ひとは長い労苦の果てにテキストを読んだと思ったまさにその達成の瞬間にまったく読めていなかったことがわかるという転落、そのように一転して奈落へと真逆さまに突き落とされるというシシュフォスのようなプロセスに置かれるのである。

この終わりなき「理論」はひとつの特定の立場を打ち立てることなく、あらゆる立場に介入しうる批判的な理論を主張しながら、まさにそのことによってみずから消え去ってしまう反-理論である。ド・マンの言葉でいえば「理論への抵抗」そのものを理論化することで理論たることを自己抹消する働きを担うのであり、この意味で「ワイルド・カード」（鬼札、ジョーカー、ババ）のような何ものかとして現れてくる。ガシェはまさにこの点に注目し、これを本書のタイトルと

したのであった。

2 修辭的読解から美学的読解へ

それにしてもド・マンは、このような戦慄させる自己破壊的帰結を導き出すことによっていったい何をしたことになるのだろうか。ド・マンにとってはたして読むことは何であったのか、何をもってテキストを読んだことになるのか、そもそも何のために読むのか、とド・マンの読者は反問せざるをえない。実際のところ、ド・マンのテキストには、そのような問いを読者に突きつけたまま煙に巻くようなところがある。

本書の冒頭、ガシェは序論を「ポール・ド・マンの著作を読んだことのある者のなかで、少なくとも最初は、何も理解できなかったという経験を免れた者はほとんど——あるいはまったく——いないのではないだろうか」（9頁）と吐露することによって書き起こしている。この「ほとんど全面的な無理解」は、しかし、ガシェがこれからド・マンに近づこうとする読者にむけた謙遜や譲歩を言い表したものではない。この「無理解」は、本書ほどまでにド・マンの手のうちを明るみに出す徹底した論述を尽くしたあとでも、ガシェはあらためてそのまま同意するにちがいない。われわれにとって「読むこと」は理解のための最初の行為であるはずが、ほかならぬ「読むこと」によってあらゆる理解の最終的な根拠を打ち砕く結論——かつそうした結論の理解すら許さない結論——を出してしまったのがド・マンのいう、アレゴリーとしての読解理論だからである。

こうした「結論」に対してド・マンの読者は、懐疑主義、ニヒリズム、シニシズム、頹廢主義、ペシニズム、否定神学等々、あらゆる否認と揶揄の言葉を投げつけることができるだろう。しかしド・マンの読むことの理論が権利上こうした見方を斥けることができないジレンマを抱えながらも、ガシェが本書によって達成した議論によれば、これらの見方がすべて早計であり、間違っただけだということになるだろう。

ド・マンの著作について本書がとるアプローチは、原則的にはきわめてオーソドックスなものだ。冒頭にも述べたように、ド・マンの著作の独自性——そのシンギュラリティ、イディオシンクラティックなもの——を解明するために、そのテキストが取り囲まれている既存の批評理論や哲学思想に照らしてそのテキストを精読していくことだからである。

第I章では、ド・マンが『読むことのアレゴリー』で援用している言語行為論に対してド・マンが実のところいかに変形的に介入しているのかが明らかにされる。そのためにガシェは、ド・マンそのものからはいったん離れ、ガシェ自身の観点から言語行為論を批判的に検討し、言語行為論の革命（とオースティンが呼ぶもの）が、分析哲学の伝統に、全面的言語行為の観点から、自己反省と自己言及の観点を持ち込んだことにある点を解き明かしている。ガシェによれば、こうした反省性の観点そのものはいささかも革命的ではない。というのもこの観点は、まさにデカ

ルト以来のコギトの問いを行為論へと翻訳した議論とみなしうるからであり⁵、その後、カント、フィヒテ、ヘーゲル、そしてハイデガーというドイツ哲学の伝統によって問い直される自己「措定」概念の問いに直結するものだからである。

ガシェは、ド・マンのパフォーマティヴ概念の再錬成を、ドイツ・ロマン主義の伝統におけるフリードリヒ・シュレーゲルのパラバシス概念の拡張という線から捉えることにより、ハイデガーが古代ギリシア語への遡行から説き起こしたテシス概念に匹敵するものと評価している。そのことを通じて「読むことのアレゴリー」を提示するド・マンの企てを「形式と内容とをともに生成し同時に両者をとともに破綻させる「行為」の詩学（ポエティクス）」「ポイエーシス（創作）の過程の詩学」（67頁）であると結論づけるのである。

この第Ⅰ章は、本書全体のド・マン読解のマトリックスを構築しているとともに、初出において「今日ド・マンのテキストについてのもっとも豊饒で鋭敏な読解」⁶とデリダに評価されたように、いまやすべてのポール・ド・マン研究にとって不可欠なド・マン的脱構築の基本的骨子を提供するものとなっている（本書は大著で読み切れないという人も、第Ⅰ章にだけは取り組むべきである）。

ド・マンの遺稿集である『美学イデオロギー』は、カントやヘーゲルの美学を論じるものであり、いっけん修辭的読解の企てから離れているようにみえる。しかし第Ⅱ章で明らかにされているように、修辭学の領域を美学の領域へと拡張するかたちで前者の延長線上に「美学的読解」が企てられていることがわかる。この読解は、カント『判断力批判』における認識や道徳に対する美的判断力の先行性を通じて、美学の問いの不可避性を確認するとともに、そこから生じる全体的幻影——カントでは体系の統一を保証する接合点——が「美的なもの」のカテゴリーそれ自体によって内在的に批判されていることを証示するのである（脱構築の第一段階）。

これはド・マンが「視覚の物質性」として剔抉しているように、いかなる美的現象性をも拒むものである。つまり、このとき美学はひとつの自己崩壊的なカテゴリーとしてしか説明しえないことになる。ド・マンはこれを「文字の散文的な物質性」という言語唯物論的な観点から指摘しているが、それ自体としては、まったく無意味なランダムネスとして現れてこざるをえない（脱構築の第二段階）。にもかかわらず、あるいはそれゆえにこそ、このような唯物論——ド・マン＝ガシェはカントにそくして（美的目的論的内容を欠いた）「形式的唯物論」と呼ぶ——そのものも脱構築されなければならない。というのも、ド・マンがそもそも呈示せんとしていたものは——これはもともとはカントの美的判断力の対象である——は、そうした唯物論として提示されるようないかなる概念の一般性、いかなる普遍と特殊の弁証法からも解放されたときにのみ浮き彫りにされる単独性（シンギュラリティ）だったからである（脱構築の第三段階）。ガシェは、ド・マンのこの美学的読解を、差異をつくりだす哲学的差異化そのものに対する終わりなき（無）

⁵ この点についてガシェは言及していないが、ヤーッコ・ヒンティッカの有名な論文「コギト・エルゴ・スムは推論か行為遂行か」（デカルト研究会編『現代デカルト論集Ⅱ——英米篇』勁草書房、1996年、21–35頁）を参照。

⁶ 前掲『メモワール』284頁。

差異の立場として特徴づけている。

3 読むことの言語的窮境

第I章と第II章で打ち立てられたド・マン的読解の修辞学／美学批判を基礎としつつ、本書はこの問題をより広いコンテクストへと展開している。ここからは特筆すべき論点をごく手短かに指摘しておこう。第III章では、クルティウスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』で掲げられている修辞学の復権が、ド・マンの「無情動（アパテイア）の修辞学」によって掘り崩されていることが明らかにされている。クルティウスの顕揚する修辞学から導かれた統合と普遍のパトスは「ヨーロッパ」「西洋」「精神的なもの」といった保守伝統的な（こう言ってよければ右派の）自由主義と結びつく。ド・マンがカントの『判断力批判』を經由して見いだした形式的唯物論は、そうしたパトスを根底から疑問に付す。ガシェによれば、ド・マンのこうした徹底した批判が示唆しているのは、個人を媒介する普遍的全体性を基盤としないような、普遍と個物の弁証法を逃れるもうひとつの共同体の可能性なのである。

第IV章は「読むこと」という主題にかんして音読と黙読との対立が扱われている点が興味深い。近代の読解概念は、読み取るべき真理への近さという点で、声を必要とする音読（韻文）ではなく、明らかに黙読（散文）を重視している。ド・マンが『理論への抵抗』で述べていた「たんなる読解」もまた現象主義への抵抗という点では、ヘーゲルも同じ言い回しでそう述べたように黙読の側にある。しかしガシェによれば、ド・マンの「たんなる読解」は「黙読以上に沈黙して」（164頁）おり、無音であるだけでなく「意図的に盲目」を実践しさえするのである。それが企図しているのは、名と指示対象との自然なつながりがあるとするあらゆるクラチュロス主義を排することであり、そうすることにより、ド・マンが「文学性」と呼ぶものの「言語の自律的な潜勢力」を解放することを目指すのである。

第V章においてようやくデリダとド・マンとの関係が明示的に問題となる。第I章には、すでに「ド・マンは脱構築の概念を明示的に適用するところではデリダと違って、むしろデリダという名にまったく言及しないところでこそデリダに近い」（39頁）という指摘があった。第V章では、デリダの「プラトンのパルマケイアー」の検討を通じてデリダとド・マンのあいだの「読むこと」の違いを解明している。ガシェによれば、デリダのプラトン『パイドロス』読解は、パルマコン（薬＝毒）のような言語の決定不可能性に着眼することで、プラトン主義の母型を解明すると同時に、なぜそのことがテキスト読解にとって盲目でありつづけるのか、その問いによってさらなる読解の可能性を開くエクリチュール（書記行為）の生産へと通じている。それに対して、ド・マンは、そうした母型を構築すべくロゴス／ミュトス、知性的なもの／感性的なもの、概念／隠喩といった差異のネットワークに依存するデリダの分析自体に美学イデオロギーの残滓を見いだすだろう。「そのような〔差異化の〕最小限の連絡関係という想定は、ド・マンにとっては、言語と現象世界との宥和という哲学的幻想の最後の隠れ処にはほかならない」（239頁）。

デリダにとって決定不可能性は、解釈の新たな決定や生産の境位ないし媒体でありうるが、ド・

マンは、そのような「逃げ道」をすら許さない。ド・マンの決定不可能性は「決定の絶対的な不可能性」（249頁）にほかならず、解消不可能な「言語的窮境」なのである。そこから出てくる最終的なパラドックスは、ガシェによれば、次のようなものである。すなわち、言語を通じた「一切の認識が無効になることによって、奇妙にも、当の言語の決定不可能性がいっそう遠ざかることになる」（250頁）。

かくしてガシェは、言語行為論、ドイツ観念論、解釈学や修辞学（クルティウス）、そしてデリダ的な脱構築からも断絶し、それらに抵抗するド・マン的脱構築の特異性を描き出している。しかし、そうした言語的窮境へとみずからを追い込み、あらゆる理解、および理解不可能性それ自体の理解からも遠ざかるような読解はいったい何をしようとしているのだろうか。「そもそもなぜ読むのだろうか」（250頁）。いかなる理解や認識をも無効にしてしまう読解によって、読解の企てを他の行為と区別して取り組むこと、そうしたこと自体が無意味になってしまうのではないだろうか。そのような袋小路に行き着くぐらいなら、はじめからド・マンのいう読解を引き受けないほうがよいのではないか。あらためて当初の問いが回帰してくることになる。それも今度は伝統や同時代の理論との対決を経て、いっそう深刻な重みをもって当の問いは反復されることになるだろう。

筆者のみるところ、ガシェは、ド・マンの企てをめぐるといった問いに対して明確な回答を与えていない。というのも、そうした問いに一般的な回答を与えてしまえば、まさに当の読解のもくろみを裏切ってしまうことになるからである。すなわち、いかなる概念の一般性からも逃れる、当のテキストの単独性を救い出すこと、そのイディオシンクラティックなものを呈示するというもくろみである。ガシェによれば、このような単独性の救出によってこそ、当のテキスト固有の出来事の歴史性、ド・マンが「言語の唯物論的な歴史性」（304頁）とほのめかすものを明らかにできるのである（これはハイデガーやデリダの出来事概念とのさらなる峻別を要求するものであり（本書314頁註32参照）、ド・マンの歴史概念を論じるには機会を改める必要があるだろう）。

ガシェは、最終的にテキストの単独性を救い出すというこの課題を、ド・マンのボードレール読解である「叙情詩における擬人法と譬喩」の分析によって果たそうとしている。これはまさに読者が実際に読むことによってしか享受しえない経験であり、ド・マンによる読むことの現場をつぶさに見届けることが第VI章の要諦をなすだろう。そのために、ここでこの章の解説めいた記述に甘んじることなく、ぜひ本章のガシェの読解を通じてド・マン的読解プロセスそのものに身をゆだねてみられたい。

4 全体主義への抵抗

本稿を締めくくる前に、本書最後に付加された「補遺」の章について述べておきたい。冒頭でも述べたように、戦時中青年期ド・マンが占領下でのベルギーにおいて対独協力的だった新聞紙上で反ユダヤ主義的な一節を含む記事を寄稿していたことがド・マンの死後に合衆国の新聞紙上で暴露され、大きなスキャンダルとなった。本章はこの一件についてのガシェの考察である。

この一件はスキャンダルとなったが、ド・マン自身が反ユダヤ主義者であったという事実はなく、大局的にみれば、20代はじめの若者が当時の政局のもとで圧力を受けていた困難な状況——妻子を養わねばならない身で「解雇や強制労働をちらつかせられていた」（321頁）——のなかで執筆された記事だということは留意されるべきである。明確に差別的と言える記事は、占領下の記事の二百編近くのうち一篇にすぎず（「現代文学におけるユダヤ人」）、ガシェが指摘するように、明示的でなくとも読み方によっては反ユダヤ主義的と解釈しうる類いの言葉遣いをしているものが他に二篇みつかるとのみである。

また、ガシェが本章の冒頭からはっきりさせているように、ド・マンは、戦後のベルギー新政府によって設置された公機関から戦時中の活動にかんして有罪判決を受けることはなかった。また、ド・マンが渡米後（1955年）に受けたハーヴァード大学の給費研究員制度による尋問でも、ド・マン自身がこうした寄稿をしていた過去を公的に釈明しており、そのうえで問題視されることはなかった。この一件は知っている人は知っていたし、ド・マンにとって、これは隠し続けたとか沈黙し続けたとかというより⁷、法的にはケリがついたことであったのだ。

それでもしかし、これは、ポール・ド・マンの無罪を意味しないという点に変わりはない。ガシェが綿密に分析するように、青年期のド・マンの一連の新聞記事は、ベルギーのフランドルの独立を守るべくしてナショナリズム、ヨーロッパ主義、国民性の類型といった当時の右翼・保守的な議論のさまざまなステレオ・タイプにからめ捕られたものであり、それらはけっして直接に対独協力のイデオロギーを主張するわけではないものの、そうしたイデオロギーに抵抗できないまま連累する可能性を否定できない。

これらの記事と後年のド・マンの著作を並置したときに明白になるのは、ガシェによれば「ド・マンの成熟期の作品こそ、まさに彼が破滅的なイデオロギーと妥協することを許した諸概念、観念、カテゴリー、イデオロギー素への容赦なく痛烈な批判にほかならない」（325頁）ということである。つまり、ド・マン的脱構築においてテキスト理解のあらゆる全体化を断ち切ろうとする徹底して否定的な言説、すなわち「決定の絶対的な不可能性」にとどまり続けようとする仮借なき探究は、むしろ青年期のド・マンの新聞記事と対照させることでその射程が明らかになる。要するにこれは、理論であれ実践であれ全体主義のいかなる要素とも手を切ろうとする、あたらかぎり厳格な身振りなのである。もちろんそうした身振りを「初期の新聞記事での主張に対する一種の償い、罪滅ぼし」（352頁）とまで言うことは慎まなければならないともガシェは述べている。

⁷ ド・マンの「沈黙」が過去の隠蔽ではないことについて、柄谷行人は次のように記している。「彼の死後、同僚の教授が、ド・マンが何も言わなかったことで衝撃を受けたと語ったそうだ。しかし、ド・マンが「隠して」いたと言うなら、間違いだ。彼が黙っていたのは、誰も私のように尋ねなかったからだ。これは、理解しそうにもない相手に、わざわざ自分から話すような事柄ではない。ド・マンが私に話したのは、私が尋ねたからだ。そして、誰もド・マンにそのことを聞かなかったのは、そんなことに興味がなかったからだ。彼らがド・マンに求めていたのは、フランスの最新理論にすぎなかった。一方、フランスでは、占領下ベルギーの知識人のあり方に興味を持つものはいなかった」（柄谷行人「ド・マンは何かを隠したのか」『思想』2013年7月号、296頁）。また、この「沈黙」についてのデリダの見解は、前掲『メモワール』258頁以下を参照。

それ自体ド・マンの著作を一人の実人生の贖罪へと全体化する解釈はド・マンの企図そのものに反することになってしまうだろう。テキストの単独性を救い出すド・マンのテキストそのもののイディオシンクラティックな核心を踏みにじることになってしまうだろう。

デリダは「ポール・ド・マンは肯定の思想家であった」⁸と彼の死後にその著作を讃えていた。ロドルフ・ガシェのド・マン論は、デリダのようにド・マンの身振りの肯定性そのもの——デリダはそれを「約束の記憶」として取り出す——を強調することはないが、本書がド・マンとともに、そしてド・マンのテキストのうちに一貫して追究している「絶対的に単独的なもの」こそが、ド・マンの読解そのものにそくして、実際には肯定されていることがわかるだろう。

そもそも肯定しうるものを肯定する必要はない。そうした肯定はたんなる追認であり、すでに肯定されているも同然だからだ。そうではなく、その絶対的な単独性ゆえにいかなる一般的な理解にもテーゼにも還元しえない不可能なもの、このかけがえのない不可能なもののみが唯一肯定するに値するのである。そうした肯定の次なる一步をいかにド・マンの読者は踏み出すことができるのか——本書の圧倒的な達成を前にして、われわれはそのような問いに応答する責任を課されることになる。それこそが、本書がそれ自身の単独性のもとでポール・ド・マンのテキストを通じてわれわれに対して突きつけている応答責任の使命にほかならない。

⁸ 前掲『メモワール』49頁。